

田中富士夫 1968 (a) 人間運動反応と知能との相関研究の概観. 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」 pp. 11-25.

知能とM反応との相関研究25篇を調べると, IQとMの相関は, -0.137 から $+0.67$ まで幅広く分布しておりその中央値は $r = 0.30$ で, 両者間には低いながらも正の有意相関が認められた。また, Mが表わす知能は, 反応に読み込まれている運動量と正の関係があり, 動作性知能よりは言語性知能に近く, 収斂的思考よりは発散的思考に近い側面を指すと解された。

田中富士夫 1968 (b) 運動反応の型の問題. 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」 pp. 35-47.

Rorschach が提唱したMの「伸張型」と「屈曲型」は, かなり曖昧な概念であることが指摘され, またこの両型に付与されているいくつかの解釈仮説の内容も多分に曖昧な面を含んでいることが知られた。この仮説に関する従来の妥当性研究を吟味した結果として, 伸張M仮説と屈曲M仮説はそれぞれ別個に研究を進めていく方が望ましいと考えられた。

田中富士夫 1968 (c) 六歳児におけるロールシャッハ運動反応と知的機能. 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」 pp. 75-88.

6歳の幼稚園児54名をSとしたM反応とIQ(田中びねー)及び創造性(トランス流の創造性検査)との相関研究。MとIQとの間には, 成人と同程度($r = 0.296$)の相関があった。しかし, 創造性とMとの相関もIQと同程度($r = 0.298$)であり, Mが必ずしも発散的思考型の知的機能を特によく反映しているとはいえなかった。

Taulbee, E.S. 1955 The use of the Rorschach test in evaluating the intellectual levels of functioning in schizophrenics. *Journal of Projective Techniques*, 19, 163-169.

分裂病患者について, ロ・テストの知的因子とW-B検査(I型)との相関を求め, またロ・テスト所見からIQの推定を試みた。

M反応は, W-Bのどのスコアとも有意な相関が認められなかった。Mは創造的思考や抽象的態度を表わすと考えられているから, 斯かる結果は当然期待されるところであるという。

Taulbee, E.S. 1961 The relationship between

Rorschach flexor and extensor M responses and the MMPI and psychotherapy. *Journal of Projective Techniques*, 25, 477-479.

MMPI(D, Pt, Mf)や, 心理療法での継続性, 改善度との関係から屈曲, 伸張Mの意味を検討した論文。神経症患者55名の結果では, 屈曲MはD尺度, Pt尺度とは正相関($+0.51, +0.43$)があるがMf尺度とは無関係($+0.05$)。心理療法に対して, 継続群の方が中断群より伸張M群の者が多く, 改善度と伸張Mとは有意ではないが正相関の傾向がみられた。

Tedford, W. H., Jr. and Lake, A.E., III. 1970 Influence of stimulus symmetry on the movement responses. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 34, 16-18.

インクブロットの相称性がM反応産出に関与するかどうかを確かめるのが目的。Sは大学生。HITのなかの相称性の高い8枚, 低い8枚を比較し, またブロットを半分だけ呈示する方法と正規の方法との比較も行った。その結果, 刺激の相称性がM反応成立に役割を演じているとする Arnheim の説を否定すると解される資料が得られたという。

Thetford, W. N. 1952 Fantasy perceptions in the personality development of normal and deviant children. *American Journal of Orthopsychiatry*, 22, 542-550.

精神分裂病及び正常群のM反応を, 量, M-, 運動の型, エネルギー(Zubinの尺度)の側面について比較し, また児童期, 前思春期, 青年期に分けて発達的にも比較した。一般に分裂病群はMの個数が多く, 正常群の方が発達の差が大きいことなどをはじめ, 得られた結果はFenichel のエネルギー均衡化の立場から説明された。

Thomas, H.F. 1951 A study of movement responses on the Rorschach as related to the mechanism of projection (Abstract). *American psychologist*, 6, 500.

妄想・幻覚を有する精神分裂病患者31名と妄想・幻覚をもたない精神分裂病患者23名のロ・テストとMcReynolds のCETを比較した。妄想, 幻覚群はロ・テストでMが有意に多いが, CETでは多いとはいえなかった。

Thomas, H.F. 1955 The relationship of move-